

教育委員会委員長あいさつ



「子どもの日」に想う

三次市教育委員会 委員長
沖田 稔

「子どもの日」「端午の節句」といえば鯉のぼり。“のぼりを立ててみんなで祝う／よい子になあれ大きくなあれ” やや馴染みのうすい歌であるが、これは「こいのぼり」という唱歌の2番。因みに「こいのぼり」と題する唱歌は3つあるが、いずれの歌詞にも青空高く泳ぐ鯉のぼりの勇壮な姿に子どもの健やかな成長と将来への期待とが託されている。その最たるものは、御存じ“百瀬の滝を昇りなば／たちまち龍になりぬべき／我が身に似よや男児と～”であろう。かつて、子どもたちもこれに触発されるがごとく高い志を立て、刻苦勉励した時代はあった。

一方、物質的に豊かな生活の中にあって、いまの子どもたちにハングリーな精神が不足していると言われて久しい。また、「草食系」なる修飾語が生み出されているように、自尊・自信の欠如、挑戦意欲の低下、将来への不安、TV・ゲーム漬けに大きく起因すると思われる体力の低下といった看過できない実態がある。

たしかに今の世界及び日本の情勢から将来を展望するのは決して容易なことではないし、もちろん、「社会が悪い」で片付くことでもない。現状が厳しければ厳しいほど、果敢に対処していかねばならないのであり、子ども大人を問わず、的確な状況認識に基づく熱い心と揺るがぬ意志とがまさに今、強く求められている。

思えば日本は、あの幕末という空前の激動期にあって、塾、藩校、寺子屋を中心に明治以降の近代化を支えたあまたの逸材を育てあげた。また、先の敗戦による未曾有の疲弊・混乱をも凌ぎ、経済大国として復興・発展をとげてきた。それはひとえに、日本人が有する世界のトップレベルともいえるべき教育力と教育熱の賜物であったと確信する。そして、それは今に脈々と受け継がれてきているはずである。

「子どもの日」を迎えるに当たり、「(子どもたち、体も心も)大きくなあれ」と切願するとともに、私自身、明日へのあらたな一歩を踏み出すための想いを固めたい。一篇の詩を味わいながら。

子ども

批判ばかりされた子どもは 非難することをおぼえる
殴られて大きくなった子どもは 力にたよることをおぼえる
笑いものにされた子どもは ものを言わずにいることをおぼえる
皮肉にさらされた子どもは 鈍い良心のもちぬしになる
しかし
激励を受けた子どもは 自信をおぼえる
寛容にであった子どもは 忍耐をおぼえる
賞賛を受けた子どもは 評価することをおぼえる
フェアプレーを経験した子どもは 公正をおぼえる
友情を知る子どもは 親切をおぼえる
安心を経験した子どもは 信頼をおぼえる
可愛がられ抱きしめられた子どもは 世界中の愛情を感じとることをおぼえる

(スウェーデンの中学校教科書より 川上邦夫訳)